人形解說

□□□舞臺、須磨に構へた熊谷直實の陣屋、軒下に向ひ鳩の紋をおいた白幕を懸け、正面四枚の障子（これを開くと四枚の板戸、更にこれをあけ放つと背後に迫つた山の遠見、源氏の白旗ところ〳〵に飜つてゐる）、上手に筋交ひ屋體、これも四枚の障子にて仕切る。眞中に階段（降段のため開閉の仕掛け）、下手に今を盛りと咲く櫻の立木、その根元に制札を立ててゐる。

□□□熊谷の妻相模は一子小次郎の安否を氣遣つて國元から尋ねて來ると、敦盛卿

人形の演出とその解說

大西重孝

本誌增ページの第二企劃として本號から大西重孝氏の「人形の演出とその解說」を毎號連載してゆくことにしたが、先づそのトップに「一谷嫩軍記」の三段目「熊谷陣屋」を選んでいただゐた。

これは文樂鑑賞の最も權威ある案內書でもあり、さらに文樂の人形研究としても後世に殘る貴重な資料たらしめたいと願つてゐる。

好評の「梅玉藝談」とともに毎號御精讀を賜りたい。（編輯室）

院本本文

一谷嫩軍記（いちのたにふたばぐんき）

熊谷陣屋の段

連れて行く。一相模は障子押開き。日も早や西に傾きしに夫の歸りの遲さよと。待つ間程なく。熊谷の次郎直実。二花の盛りの敦盛を討つて無常を悟りしか。三さすがに猛き武士も。物の哀れを今ぞ知る。思ひを胸に立歸り。四妻の相模を尻目にかけて座に直れば。五軍次はやがて覆（おほひ）になり。先達（さきだつ）て平次景高殿。何か詮議

の母藤の局は源氏方に追はれて偶然この陣屋に逃込み相模に會ひ、敦盛の首を討つた夫を討たせと迫る。梶原景高は脇ケ濱に敦盛の石塔を建てた石屋彌陀六を詮議のため縄付にして引連れ、熊谷の歸りを待つといふのが、この一段の端場に仕込まれた筋である。

（一）相模（かしら老け女形、髪片はづし）淺黄えどときの着付に同じ打掛、藤の局から聞かされた敦盛討死から降つて湧いた難題、吾が子の安否にとつおいつ心を傷め乍ら上手屋體から出て夫の歸りを待つ。

（二）熊谷直實（かしら文七、髪操揚げ）黑天の着付、赤地八枚の裃、廟參の歸りの態にて、左手首に數珠をかけ腕組みをして面を伏せ下手横幕から出る。

（三）下手で正面になり陣屋に着いたことに氣つき「思ひを胸に」でクルリと後向けとなり、櫻の木を見上げて、すぐ下手から屋體に入らうとする。

（四）思ひがけない妻の姿を見かけて、複の節ありとて御影の石屋を引連れ御出有り。奥の一間に御待と。委細を述ぶればムウ詮議とは何事ならん。アいや其方は一献を催し。梶原殿を饗し申せ。サア早くいけ〳〵。ハテ扨何を猶豫すると。呵りちらされ是非なくも。相模に顔を見合して心を。残し入りにけり。跡見送りて。熊谷は。コリヤ女房。其方は爰へ何しに來た。國元出立の節。陣中へは便も無用と。堅く言付け置いたるに。詞を背くといひ。剩へ女の身で陣中へ來る事。不屈至極の女めと。不興の体に相模はもぢ〳〵。其お呵りを存じながら、どうかかうかと案じるは小次郎が初陣。一里いたら様子が知れうか。五里來たら便があろかと。七里歩み十里歩み。百里餘りの道をつい。都迄ホヽヲヽしんき。登つて聞けば一の谷とやらで今合戰の最中と。とり〳〵の噂ゆゑ子に引かされるは親の因果。御了簡下さりませ。マア此小次郎は息災で居ますかと。問へば熊谷詞を荒らげ。戰場へ赴くからは命はなき物。堅固を尋ぬる未練な性根。若し討死したら何とする。いゝえいな小次郎が初陣に。よき大將と引組んで討死でも致したら。嬉しい事でござんしよと夫の心に隨ひし。健氣な詞に顔色直し。

雜な心の動搖をみせる。

〔五〕熊谷が上手の座に直ると入違ひに上手屋體から堤軍次（かしら源太、髮武士番）淺黄熨斗目の着付に織物の袴にて出で、相模をかばふ位置に座して迎へる。

〔六〕軍次は已むを得ず立上らうとするのを相模がその太刀の鐺を扣へて止めるので、目顏で制して莨盆を前に殘し、足早やに上手へ去る。

〔七〕相模は莨盆を兩手に捧げておず〳〵と夫の前にすゝめる。

〔八〕熊谷は莨をくゆらし乍ら相模の言譯を聞く。

〔九〕相模の心を探らうとする熊谷の肚をつかふ。

〔一〇〕上手の障子を開き藤の局（かしら老け女形、髮唐毛のすつぽり）毫鉢卷を締め、白倫子の着付、同じ打掛の上から腰紐を結んで兩袖とも脫ぎかけた姿にて窺ひ寄る。

〔一一〕相模氣遣はしげに膝を進める。

〔一二〕太夫は「ソソソ、ソーレ〳〵」と語

一〇 ホヽ、先づ小次郎が手柄といふは。平山の武者所と爭ひ拔駈けの高名。軍門に駈入つての働き。一一 手疵少々負うたれども。末代迄家の誉。エヽして其手疵は。急所ではござりませぬか。一二 ソレまだ手疵を悔む顏付。若し急所なら悲しいか。イヤ何のいな。かすり疵でも負ふ程の働きは。でかしたと思うて嬉しさの餘りお尋ね。其時お前も小次郎と一所にお出なされたか。ホウ危しと見るより軍門に駈入り。小次郎をむりに引立て小脇にひんだき。一四 我が陣屋へ連れ歸り。某は其軍に搦手の大將。一五 無官の太夫敦盛の首取つたりと。話に扨はと驚く相模。後に聞きゐる御臺所一六 我が子の敵と在りあふ刀。熊谷やらぬと拔く所鐺摑んで。ヤア敵呼ばはり何やつと。引寄するを女房取付き。アーこれ〳〵一七 聊爾なされな。あなたは藤の御局樣と。聞いて直實惚りし。一八 ハア思ひがけなき御対面と飛退き敬ひ奉れば。コリヤ熊谷。軍の習ひとは言ひながら。年はも行かぬ若武者を。ようむごたらしう首討つたなア。一九 サア約束ぢや相模。助太刀して夫を討たせ。何と〳〵と刀追取りせり付け給へば。アイあい〳〵と返事も胸に迫りながら。エヽこれ直實殿。敦盛樣は院のお胤と知りながら。

り、熊谷は煙管を以て妻をたしなめる。
〔一三〕 煙管を前について兩手を重ね、これに掩ひかぶさるやうに上半身を乘出す。
〔一四〕 煙管と莨盆とを消す。
〔一五〕 兩手を大きく開いて極る。
〔一六〕 藤の局かけ出でそこにおかれた熊谷の太刀を奪つて手をかけると、熊谷は驚いてその膝を拂ひ、のめるところを刀の鐺を逆に取つてその太刀の下に局の身體を押さへ付ける、相模かけ寄つて夫にとりつく。
〔一七〕 相模に次いで藤の局の出現は熊谷にとつて豫期しなかつた大きな当惑である、太夫も人形もこれを充分に表現する。
〔一八〕 斬りつける藤の局の尖先をかはして、太刀を抛出して平服する。
〔一九〕 藤の局は熊谷の太刀を相模に突付け、相模はその太刀を抱いて途方に暮れる。
〔二〇〕 熊谷、軍扇を手にとる。
〔二一〕 懐劍に手をかけて氣色ばむ局に構はず大きく正面に座を構へる、これより物語り（形容を交へた仕方話）となる、敦盛と

どう心得て討たしやんした。樣子があらう其訳をと。いふもせつなきうろ〳〵涙。アヽ愚か〳〵。此度の戰ひ敵と目ざすは安德天皇。夫に隨ふ平家の一門。敦盛は扨置き。誰彼と鎬を削るに用捨がならうか。ナウ藤の御方。戰場の儀は是非なしと御諦め下さるべし。其日の軍の概略と。敦盛卿を討つたる次第。物語らんと座を構へ。扨も去んぬる六日の夜。早や東雲と明くる頃。一二を爭ひ拔駈けの。平山熊谷討取れと切つて出でたる平家の軍勢。中に一際勝れし緋威。さしもの平山あしらひ兼ね浜辺をさして逃出す。ハテ健氣なる若武者や。逃ぐる敵に目なかけそ。熊谷是に扣へたり。返せ。戻せ。ヲヽイ。おいと。扇を持つて打招けば。駒の頭を立直し。波の打物二打三打。いでや組まんと馬上ながらむんずと組み。兩馬が間にどうど落ち。ヤア〳〵何と其若武者を組敷いてか。されば御顔をよく見奉れば。鐵漿黑々と細眉に。年はいざよふ我が子の年ばい。定めて二親ましまさん。其歎きはいかばかりと。子を持つたる身の思ひの餘り。上帶取つて引立て塵打拂ひ早や落ち給へと勸むれど。イヤ一旦敵に組敷かれ何面目に存へん。早や首取れよ熊谷。ナ

見せて吾が子小次郎を討つた熊谷の肚を表現の底に見せる太夫と人形遣ひの技倆を鑑賞せねばならない。

〔二二〕右足を踏出し軍扇（黑地に朱の丸）を開いて右下に、左手は左の肩衣の緣をしごきあげた見得。

〔二三〕「濱邊をさして」で上手向きとなり、次の合の手テテテン、テテテンに合せて、敦盛と平山との一騎討の有樣をはるかに眺めてゐる心で軍扇でさし乍らそのまゝ正面におつて來ると「逃出す」となつて下手へサッと横一文字に指した拍子に腰を落した形で左手を後について極る。

〔二四〕右に軍扇を開いて高く翳した見得。

〔二五〕軍扇を胸に抱いて組合つた形をつくる。

〔二六〕上手斜に身體をひねつて腰を浮した形から下手にひるがへして膝を突き、軍扇を右下に敦盛を組敷いた形となつて、藤の局を見返る極り。

〔二七〕敦盛の顎に手をかけて見る心で、軍

ニ首取れというたかいの。健氣な事をいうたなう。サア其仰にいとど猶。涙は胸にせき上げし。まつ此通りに我が子の小次郎。敵に組まれて命や捨てん。浅ましきは武士の習ひと太刀も。拔兼ねしに。逃去つたる平山が後の山より声高く。熊谷こそ敦盛を組敷きながら助くるは。二心に極りしと呼ばはる声々。エヽ是非もなや。仰置かるゝ事あらば。言傳へ参らせんと申上ぐれば。御涙をうかめ給ひ。父は波濤へ赴き給ひ。心にかゝるは母人の御事。時日に変る雲井の空定めなき世の中をいかゞ過行き給ふらん未來の。迷ひ是一つ。熊谷賴むの御一言。是非に及ばず御首をと。咄す中より藤の局。ナウ左程母をば思ふなら経盛殿の詞に就き。なぜ都へは身を隱さず。一の谷へは向ひしぞ。健氣によろうた其時は。母も倶々悅んで。勸めてやりし可愛やな。覚悟の上も今更に。胸も迫りて悲しやとくどき。歎かせ給ふにぞ。御尤もとは思へども相模は態と声励まし。イヤ申しお局樣。御一門残らず八島の浦へ落行き給ふ。中に一人踏留まり。討死なされた敦盛樣。数萬騎に勝れた高名。但し逃げのび身を隱し。人の笑ひを受け給ふが。お前の氣では嬉しいか。御未練

扇を平にひらいて見る。

〔二八〕 敦盛の塵を拂ふ心で、太刀を左へとつて軍扇で鐺を拂ひ、束頭を拂ふ。

〔二九〕 藤の局から見られないやうに軍扇を顏の左側に立てゝ持ち、局の方へ目をつかふのを古い型として、別に相模から見られないやうに顏の右側に立てゝ持つて相模の方へ目を遣ふ型とがある。

〔三〇〕 左へ太刀を抱へて斬りかねる。

〔三一〕 右足を踏出し、軍扇をひらいて左手で逆樣に翳げた見得。

〔三二〕「エヽ是非もなき次第哉」と語る。

〔三三〕 左手で涙を押へて軍扇で掩ふ。

〔三四〕 上手斜に向き軍扇を左膝へついて「昨日に變る雲井の空——」と長地と呼ぶ節事のうちに敦盛（この場合はもう小次郎の心になつて）の母を戀ふ心をつかふ。

〔三五〕 軍扇で首を斬落す形をして、チラと相模を見返り、すぐ軍扇で顏を掩つて泣きあげる。（カット写眞參照）

〔三六〕 首實檢の成否をきめる時刻も迫つた

な御卑怯なと諫めに熊谷。ヲヽでかした〳〵。コリヤ女房。御臺所此所に御座あつてはお爲にならぬ。片時も早くいけ〳〵。我も敦盛の御首実檢に供へん。軍次はをらぬか早や參れと。呼ばはる声と諸共に一間へ。こそは入相の。鐘は無常の。時を打つ。陣屋々々の灯火にいとゞ。悲しさ藤の方。アヽ思ひ出せば不便やな。今ばの際迄も肌身放さず持つたるはコレ此青葉の笛。我と我が身の石塔を建てて貰うた價にと。渡し置いた此笛の我が手に入りしも親子の縁。魂魄此世にあるならばなぜ母には見えぬぞ。聞えぬ我が子やなつかしのこの笛やと。肌に付け身に添へて盡せぬ。思ひやるせなき。コレ申し其笛がよい形見。經陀羅尼より笛の音を手向けるが直に追善。敦盛樣のお声をば聞くと思うて遊ばせと。すゝめに隨ひ藤の方涙に。しめず歌口も。震うて音をぞ。すましける。親子の縁の絆にや。障子に映るかげろふの姿は慥敦盛卿。藤の局は一目見るより。ヤレなつかしの我が子やと。かけ寄り給ふを相模は抱留め。香の煙に姿を顯はし。実方は死して再び都へ歸りしも。一念のなす所。あるまい事にはあらねども。訝しき障子の影。殊に親子は一世と申

ので意を決して、太刀をとり、「ヤア〳〵軍次はをらぬか早や參れ」と呼ばり乍ら立上り、なほ氣色ばむ局とこれを遮る相模とを殘して「一間へ――」の武者ヲクリ一杯に上手屋體へ入る。

〔三七〕 舞臺の空氣一轉、下座より時の鐘を聞かす。

〔三八〕 藤の局青葉の笛を出して敦盛を戀慕ひ、とゞ笛を抱いて身もだへる。

〔三九〕 相模香爐をのせた經机を局の前に据へ二人相次いで燒香して合掌する。やがて局は笛を吹く。

〔四〇〕「涙にしめす」と「音をぞすましける」の後に三味線は笛の手を聞かせ、下座よりも笛を入れる。

〔四一〕 正面障子に姿を撫で下しにした敦盛の鎧姿写る。

〔四二〕 これを認めて藤の局駈寄らうとするのを相模止める。

〔四三〕 再び駈寄りこれを遮らうとする相模を突退けて障子を開くと、敦盛の姿はなくせば。御対面遊ばさば御姿は消失せん。イヤなう四十九日が其間魂中有に迷ふと聞く。せめては逢うて一言をと振放し〳〵障子ぐわらりと明け給へば。姿は見えず緋威の鎧ばかりぞ殘りける。はつと計りに藤の方。相模も倶に取付いて。扨は鎧の影なるか。恋しと迷ふ心からお姿と見えけるかと。倶にこがれて正体も泣きくどく。こそ哀れなれ。時刻移ると次郎直実首桶携へ立出づれば。相模は夫の袂を扣へ。コレ申し是が親子御一生のお別れ。せめて御首になりとも。御暇乞と願ふにぞ。藤の局も涙ながらナウ熊谷。そちも子のある身でないか。野山の猛き獸さへ子を悲しまぬはなき物を。親の思ひを弁へて情に一目見せて――たもと。縋り歎かせ給へども。イヤ実検に供へぬ中内見は叶はぬと。はね退け突退け行く所に。ヤア熊谷暫し〳〵。敦盛の首持參に及ばず。義経是にて見ようずるはと。一間をさつと押開き立出で給ふ御大將。ハヽヽはつと次郎直実。思ひ寄らねば女房も。藤の局も諸共に呆れながらに平伏す。義経席に着き給ひ。ヤア直実。首実検延引といひ。軍中にて暇を願ふ。汝が心底訝しく密に來りて最前より。始終の様子は奥にて聞く。急ぎ敦盛の首実検せんと。仰を聞くより熊谷はつと答へて走り出

て鎧櫃の上に飾つた緋威の鎧ばかりが殘されてゐる。

〔四四〕熊谷、白地熨斗目の着付に織物の袴に着交へ、左に首桶を抱へて上手屋體から出る。

〔四五〕相模、藤の局は左右からとりつく。

〔四六〕さきに閉された障子が再びこゝで開かれると、板戸の後から義經の聲がかゝり板戸を拂つて義經（かしら動きの源太）緋威鎧に朋黃の狩衣を着け金冠を冠り現れる。

〔四七〕熊谷首桶を義經の前に据へ、平伏するとこの間に相模、局は下手奥に一旦姿を消す。

〔四八〕屋體を出で、制札を拔取つて戻る。

〔四九〕首桶の蓋をとると首は小次郎である、窺ひ出た相模がそれと知つて「ヤア其首は」と駈寄る、熊谷は素早く軍扇で首を掩ひ、相模の膝を拂ひ右膝の下に敷くと、それと知らぬ局もつゞいて駈出るので制札を持つて遮る。

〔五〇〕相模を蹴出すと相模は階段から前勾で。若木の櫻に立置きし制札引拔き。恐れげなく義經の御前に差置き。先つ頃堀川の御所にて六彌太には忠度の陣所へ向へと花に短冊。此熊谷には敦盛の首取れよとて。弁慶執筆の此制札。則ち札の面の如く御錠に任せ。敦盛の首討つたり。御実檢下さるべしと蓋を取れば。ヤア其首はとかけ寄る女房。引寄せて息の根とめ。御臺は我が子と心も空。立寄り給へば首を覆ひ。コレ申し。実檢に供へし後は。お目にかける此首。お騷ぎあるなと熊谷が。諫めに流石はしたなう。寄るも寄られず悲しさのちゝに碎くる物思ひ。次郎直実謹んで。敦盛卿は院の御胤。此花江南の所無は。即ち南面の嫩。一枝をきらば一指を切るべし。花に準へし制札の面。察し申して討つたる此首。御賢慮に叶ひしか。但し直実過りしか御批判いかにと言上す。義經欣然と実檢ましまし。ホヽ花を惜む義經が心を察し。アよくも討つたりな。敦盛に紛れなき其首。ソレ由緒の人もあるべし。見せて名残を惜ませよと。仰を聞くよりコリヤ女房。敦盛の御首。藤の方へお目にかけよ。アイあいとばかり女房は。あへなき首を手に取上げ。見るも涙にふさがりて。変る我が子の死顏に。胸はせき上げ身も顫はれ。持つたる首の搖ぐのを。点頭くやうに思はれ

欄に落ち、後向けとなり右手で止めた形、局は突きやられて下手から庭に落ち右手をひたいにかざした形、熊谷は右足を階段に踏下し制札を左肩に立てかけた形で三人一緒に極るのが「ちゝに碎くる物思ひ」である。

〔五一〕 左手に首を臺毎捧げて義經の前に差出し、右手の制札で駈寄る藤の局を支へ「言上す一一杯の見得、義經の意を汲んだ自らの處置に充分の自信をもち乍らもなほ且つ最後の批判を待つ緊張の瞬間である、相模は局をかばふやうにとりすがる。

〔五二〕 義經中啓をひらきその骨の間からジッと首を見る。

〔五三〕 熊谷は首を緣側におく。

〔五四〕 相模は首を紫の袱紗に包んで持ち無慚な吾が子の姿に顏をそむけ、或ひは頰すりをし、果ては胸に抱いて身もだへして泣く。

〔五五〕 藤の局こゝで初めて首が敦盛でないことを知つて駈寄る。

て。門出の時に振返りにつと笑うた面ざしが。有ると思へば可愛さ不便さ。声さへ喉につまらせて。申し藤の方樣御歎きあつた敦盛樣の此首。ヒヤア是は。サイナア申し。是よう御覽遊してお恨み晴らしよい首ぢやと誉めておやりなされて下さりませ。申し此首はな。私がお館で。熊谷殿と忍び逢ひ懷胎ながら東へ下り。產落したはア。コレナ。此敦盛樣。其節お前も御懷胎。誕生ありし其お子が無官の太夫樣。兩方ながらお腹に持ち國を隔てて十六年。音信不通の主從がお役に立つたも因緣かや。せめて最後は潔う死になされたかと怨めしげに。問へど夫は瞬も。せん方涙御前を恐れ。餘所にいひなす詞さへ。泣音血を吐く思ひなり。藤の局は御声曇り。ナウ相模。今の今迄我が子ぞと。思ひの外な熊谷の情。そなたは嘸や悲しかろ。かうした事とは露しらず。敵を取らうの切らうのというた詞が恥しい。我が子の爲には命の親。忝いと手を合せ。此首の生世の中。逢見ぬ事の悔しやと俱に歎かせ給ひしが。是に就きいぶかしきは此浜の石塔。敦盛の幽靈が建てさせたとの噂といひ。秘藏せし青葉の笛石屋の娘が貰ひしとて我が手に入り。最前其笛吹いた時あの障子に映りし影は慥に我が子と思ひしが。詞も交さず消失

〔五六〕 相模緣端に近寄り、兩手に持つた吾が子の首を夫に見せ乍ら見上げる。
〔五七〕 熊谷も悲しみを堪へ、御前を憚つて妻を退ける。
〔五八〕「藤の局は聲曇り」から「涙にくれ給ふ」迄省略するのが實演上の慣例。
〔五九〕 下座より法螺の音を聞かす、こゝで熊谷首を片付ける。
〔六〇〕 熊谷一礼して上手奥へ入る。
〔六一〕 上手横幕から梶原（かしら金時）矢筈の烏帽子、陣羽織姿で現はれ、下手へ駈出す。
〔六二〕 同じ横幕の内から彌陀六を遣ふ人形遣ひのハッといふ掛聲で石鑿が投げられた心、梶原が倒れる。
〔六三〕 義經、掛聲のした方向をキッと見る。
〔六四〕 彌陀六（かしら鬼一、髪白のひつくゝり）茶木綿石持の着付、荒い横縞の輕袴を穿ち、茶木綿の頭巾を冠りヌッと出る。
〔六五〕 梶原の死骸を右足で蹴つて片付ける
〔六六〕「幽靈の御講釋」は〔五八〕の省略に

せしは。アいや其笛の音を聞いてかけ出し敦盛の幽靈。人目ありと引止め。障子ごしの面影は義経が志と。聞いて御臺は我が子の無事。悟りながらも箒木のありとは見えて隔てられ又も涙にくれ給ふ。〔五九〕折節風に誘はれて耳を突拔く法螺貝音の喧すく聞ゆれば。義経は勇み立ちャア〳〵熊谷。着到知せの法螺の音出陣の用意々々と。〔六〇〕仰に直実畏り急ぎ一間に入りにけり。〔六一〕最前より樣子を聞居る梶原平次一間の内より躍り出で。かくあらんと思ひし故。石屋めを詮議に事よせ窺ふ所。義経熊谷心を合せ敦盛を助けし段々。鎌倉へ注進と言捨てかけ出す後より。〔六二〕はつしと打つたる手裏劍は。骨を貫く鋼鐵の石鑿うんとばかりに息絶ゆる。〔六三〕スハ何者といふ中に。〔六四〕立出る石屋の親仁。〔六五〕ハヽアお前方の邪魔になる。こつばを捨てて上げました。〔六六〕扨幽靈の御講釈。〔六七〕承つて先づ安堵。もうお暇と立行くをャア待て親仁。〔六八〕コリャ彌平兵衛宗清待てと義経の詞に恟り。はつと思へどそらさぬ顏。ハレやれ〳〵とつけもない。御影の里に隱れのない。白毫の彌陀六といふ男でえす。ハヽヽヽ。誠や諺にも。至つて憎いと悲しいと嬉しいとの此三つは。人間一生忘れずといふ。其昔母常磐の懐に抱かれ。伏見の里に凍えしを。汝が情を以て親子四人が

照應して「制札の御講釋」と語る。

〔六七〕「ヤア待て親仁」では構はず足を運んでゐて「イヤサ彌平兵衞宗清」でギックリとなり、本名を見拔かれた内心の驚きを包んで氣味合ひ。

〔六八〕何氣ない樣子で「白毫の彌陀六といふへへ男でえす」と鼻の先をこすつてそつぽを向く。

〔六九〕黑子を押へる型と押へずに眉をつかつて氣味合ひのまゝなものとある。

〔七〇〕頭巾を脫ぎすてツカ〳〵と階段へ進んで右足をかけて義經を見上げ、更に「テモ恐ろしい眼力ぢやよなア」と左膝を階段につき左手を緣板に突張つて力一杯に義經を見上げる。

〔七一〕宗清の昔にかへり、以下激しいきのつんだたゝみかけるやうな「タテ詞」、兩肌を脫ぐと南無阿彌陀佛と書いた白の襦袢姿となる。

〔七二〕右足を踏出し兩手に一杯の力を籠めて極る。

助かりし嬉しさ。其時はわれ三歳なれども面影は目先に残り。見覚えある眉間の黑子隱しても隱されまじ。重盛卒去の後は行方知れずと聞きしが。ハテ堅固で居たな滿足やと。聞くより彌陀六づか〳〵と立寄り。義經の顏穴の明くほど打眺め。ハテ恐しい眼力ぢやよなア。老子は生れながらに聰く。莊子は三つにして人相を知ると聞きしが。かく彌平兵衞宗清と見られた上は。エ、義經殿。其時こなたを見遁さずは。今平家の楯籠る鐵拐が峰鵯越を攻落す大將はあるまいもの。又池殿御臨終の折から。平家の運命未危し。汝武門を遁れ身を隱し。一門の跡弔へと。唐土育王山へ祠堂金と僞り。三千兩の黃金と。忘れ形見の姫君一人預り。御影の里へ身退き。平家の一門先立ち給ふ御方々の石碑。播州一國那智高野。近國他國に建置きし施主の知れぬ石塔は。皆これ彌平兵衞宗清が。涙の種と御存じ知らずや。今度敦盛の石塔跳に見えし時も。御幼少にて御別れ申せし故。御顏は見覚えねども。心得ぬ風俗は。ヒヤ世を忍ぶ平家の御公達ならんと思ふより。心よく受合ひしが。扨は命に代りし小次郎が菩提の爲。此浜の石塔は敦盛の志にてありけるか。ヘッエいかに天命歸すればとて。我が助けし賴朝義經此兩人の軍配にて。

〔七三〕 左手を突上げ、その脇の袖付げのところを固め、逆に右手を突上げ同じく袖付けのところを固める「エドバラ」といつて氣負つた時に用ひる人形獨特の型。

〔七四〕 正面の形から激しく右肩を突出して後斜を見せて義經をねめつける大きな「ネヂ」といふ型をする。

〔七五〕 左腕を叩き右腕を叩いて吾が身を苛む。

〔七六〕 兩足を割つて無念の心をあらはす「弓張り」といふ形に兩手を突出して或は下手へにじつて行き或は上手へにじつて行き、果は兩手で頭髪を掴んで地團太を踏んで悔恨の情に激しく狂ふ。

〔七七〕 熊谷、黑糸威の鎧兜の姿で兩手に鎧櫃を抱へて上手奥から出る。

〔七八〕 彌陀六一人言してうなづき「面白い彌陀六め頼まれて進ぜましよ」と世話にくだけた調子で兩膝を抱く。

〔七九〕 立つて鎧櫃の蓋をとると中には敦盛が忍んで居る心、二重の藤の局はこれを見

平家の一門御公達一時に亡ぶるとは。ハア、是非もなき運命やな。平家の爲に獅子身中の虫とは我が事。さぞ御一門陪臣の魂魄。我を恨まん浅ましやと。或は悔み。或は怒り涙は。瀧を爭へり。元來さとき大將義経。ヤア〳〵熊谷。障子の内の鎧櫃。ソレこなたへ、はつと答へて次郎直実。出陣の出立と好む所の大荒目鍬形の兜を着し。抱へ出でたる鎧櫃。御目通りに直し置く。コリヤ親仁。其方が大切に育つる娘へ。此鎧櫃屆けてくれよ。コリヤ彌陀六。ヤア彌陀六とは。フウ宗清なれば平家の餘類。源氏の大將が頼むべき筋は。ム、面白い。彌陀六め頼まれて進ぜましよ。したが。娘へは不相應な下され物。マア内は何でござります。改めて見ませうと。蓋押明くれば敦盛卿。ナウなつかしやと藤の方。かけ寄り給へば蓋ぴつしやり。イヤ此内には何にもない。ヲヽ何もない〳〵〳〵。ホヽ是でちつと虫が納つた。ナウ直実。貴殿への御礼はコレ〳〵此制札。一枝を伐らば一子を切つて。ヘッエ忝いといふに相模は夫に向ひ。我が子の死んだも忠義と聞けばもう諦めて居ながらも。源平と別れし中。どうしてまあ敦盛樣と小次郎を取かへやうが。ハテ最前も話した通り。手負と僞り。無理に小脇にひつぱさみ連歸つたが敦盛

つけて「ノウなづかしや」と駈寄らうとするので、あはてゝ蓋をとじ鎧櫃の前に立ちはだかり兩手を後へ伸して蓋を押へて、反返つて局を見上げる。

〔八〇〕 制札をとりあげ「ヘッエ忝い」と合掌する。

〔八一〕 熊谷兜を脱いですでに髻から髪を切つた頭を見せる。

〔八二〕 人形の都合から一旦上手奥へ入り、すぐ白の着付に黑の麻衣を着け袈裟を懸けた僧形となり右に數珠を持つて出る。

〔八三〕 合掌してから兜をとりあげ「十六年も一昔」と淋しく見やり「夢であつたなあ」と虚空を見る、そして「日影に融ける風情なり」で左の片膝を立てかけ兩袖をその上に重ねて、世捨人の悄然とした姿をつくる。

〔八四〕「ヲ、さうぢや〳〵」から「御涙にぞくれ給ふ」まで省略するのが實演上の慣例。

〔八五〕 段切も近づき、こゝで調子が高くなつて舞臺の空氣一轉し、現世への執着を絶ち兼ねた宗清と、世捨人となりすました熊卿。又平山を追駈け出たを呼返して。首討つたのが小次郎さ。知れた事をと鋭なる。話に相模はむせび入りエ、どうよくな熊谷殿。こなた一人の子かいなう。逢はう〳〵と樂んで百里二百里來たものを。とつくりと訳もいはず。首討つたのが小次郎さ。知れた事をと沒義道に。叱るばかりが手柄でも。ござんすまいと声を上げ泣き。くどくこそ道理なれ。心を汲んで御大將勇みを付けんとヤア〳〵熊谷。西國出陣時移る用意いかにと仰に直実。恐れながら先達て願上げし暇の一件。かくの通りと兜を取れば。切拂うたる有髪の僧。義経も感心有りホ、さもありなん。それ武士の高名誉を望むも。子孫に傳へん家の面目。其傳ふべき子を先立て。軍に立たん望は。ホウ尤も。コリヤ熊谷。願に任せ暇を得さするぞよ。汝堅固に出家をとげ。父義朝や。母常磐の回向も賴むと親しき御錠。ハ、ア有難しと立上り。上帶を引ほどき鎧をぬげば袈裟白無垢。相模是はと取付くを。ヤア何驚く女房。大將の御情にて。軍半に願の通り。御暇を賜りし我が本懐。熊谷が向ふは西方彌陀の國。忰小次郎が拔駈けしたる九品蓮臺。一つ蓮の縁を結び。今より我が名も蓮生と改めん。

〔八三〕 一念彌陀佛即滅無量罪。十六年も一昔。ア夢であつたなあと。

谷との対照の妙を味ふべきである。

〔八六〕 彌陀六鎧櫃の連尺を直す。

〔八七〕「立見得」といつて左手をつきあげ、斜に義經をにらんだ型をする。

〔八八〕 熊谷數珠で兩肩を淨めて合掌する。

〔八九〕 彌陀六「カンヌキ」といふ激しい動作で大手を展げた大見得を切る。

〔九〇〕 熊谷を先きにつゞいて相模階段から庭に降り上手に列び、熊谷は左に制札を持つ、藤の局も下手から降り鎧櫃を背負つた彌陀六と下手に列ぶ。

〔九一〕 四人義經に向つて辭儀。

〔九二〕 熊谷制札を見た目を義經の手にある吾が子の首に移す。

〔九三〕 義經、熊谷、彌陀六同時に「六法」といつてゆつたりとトーントーンと足拍子を踏む。

〔九四〕 相模、藤の局名殘りを惜んで双方から寄つて來るのを、熊谷、彌陀六それ〴〵遮つて正面になると「わかれて」で柝が入つて五人引張の見得の内に幕となる。

ほろりとこぼす涙の露。柊に置く初雪の日影に融ける風情なり。

八四 ヲヽさうぢや〳〵。我が子の罪障消滅の加勢は是と切つたる黒髪。詞はなくて御大將。藤の局も諸共に御涙にぞくれ給ふ。長居は無益と彌陀六は。八六鎧櫃に連尺をかけた思案のしめくゝり。

八五 コレ〳〵〳〵義経殿。若し又敦盛生返り。平家の残党かり集め。

八七 恩を仇にて返さばいかに。ヲヽそれこそは義経や。兄頼朝が助かりて。仇を報いし其ごとく天運次第恨を請けん。げに其時は此熊谷。浮世を捨てて不隨者と。源平兩家に由緒はなし。互に

八八 争ふ修羅道の。苦患を助くる回向の役。此彌陀六は折を得て。

八九 又宗清と心の還俗。我は心も墨染に。黑谷の法然を師と頼み敎を請けんいざさらば。君にも益々御安泰。

九〇 お暇申すと夫婦づれ。石屋は藤の御局を伴ひ出づる陣屋の軒。御縁があらばと女子同

九一 士。命があらばと男同士。堅固で暮せの御上意に有がた涙名残の涙。又思ひ出す小次郎が。首を手づから御大將。此須磨寺に取納め末世末代敦盛と。其名は朽ちぬ黄金札。

九二 武藏坊が制札も

九三 花を惜めど花よりも。惜む子を捨て武士を捨て。すみ所さへ定めなき有爲轉變の世の中やと。互に見合す顔と顔さらば。〳〵。

九四 おさらばの声も涙にかきくもりわかれて。こそは出でて行く。